

過去の記憶

三重県 佐藤 恭典

昭和二十（一九四五）年八月、両親、弟二人、妹、そして私の家族六人は、今はなき満州の鞍山^{アンザン}という場所^{アンザン}で暮らしておりました。

両親の渡満についての経緯は、今日まで両親が話すこともなく、私からも聞くこともせずに悔やんでいません。既に両親は他界したため、定かではありませんが、昭和初期の日本経済が不況時期に、満州という雄大な地で飛躍するためだったと思います。父は、全満州にゆきわたる運送会社に勤務するサラリーマンとして、大連を皮切りに撫順^{フジュン}、鞍山^{アンザン}、錦州^{キンシュウ}、新京^{シンキョウ}（長春^{チャングン}）、奉天^{ホウテン}（瀋陽^{シェンヤウ}）、敗戦の時は再び鞍山へと、二年から四年ごとの転勤族でした。

昭和六年、満州事変勃発、この年に私は遼東半島の突端にある大連で生まれたのです。昭和十二年、日中

戦争拡大、昭和十四年、ノモンハン事件、昭和十六年、太平洋戦争勃発そして、昭和二十年の敗戦。敗戦のときは、私は十四歳でショックでした。

幼年期から昭和十七年、小学校高学年ごろまでは、日中戦争、太平洋戦争のさなかで、「五族協和」「王道楽土」「大東亜共栄圏の建設」「八紘一宇」など、既に帝国主義、軍事国家のもと、「国民教育」という教育をたたきこまれていました。小学校、中学校では毎朝の朝礼には校長先生からの訓示、各記念日の式典には校門に日章旗を掲揚し、教職員をはじめ全校生徒は講堂に集合させられ、最初に教頭先生の号令により皇居に向かい拜礼、続いて「君が代」の斉唱、引き続き教育勅語の奉読となり、おもむろに校長先生が白い手袋をはめ、演台の中央奥の奉安殿のほころから教育勅語を取り出し、箱の蓋を開け、巻物に拜礼をして厳かに読まれ、全員神妙にこうべを垂れ聞き入りました。

当時は、近隣諸国への侵攻による戦勝時期で、満州も関東軍の制圧下であり、「五族協和」の旗印のもと日本人、満州人、中国人、朝鮮人、蒙古人、白系ロシア

ア人、お互いにいさかいなく、関東軍の国境警備隊による匪賊、馬賊の討伐を耳にすることも再三ありましたが、おおよそ平静な暮らしてました。

昭和十八年四月、旧制の錦州中学校入学、第一学年中期ごろまでは、一般教科が中心の授業でしたが、その後に配属将校による軍事教練の教科が加わりました。十二、三歳の少年が軍国少年として登校、下校時には国防色の学生服、戦闘帽、足には巻脚絆、編上靴、そして背中にランドセル型の背のう、という姿で通学するのです。途中で教官、上級生に会えば挙手の礼での挨拶、これは目下の者の義務なのです。最初に体力と精神力を鍛えるべく、一般体操、器械体操、相撲、柔道、剣道、銃剣術などは必須教科で、軍事教練では、天皇陛下より賜ったとされる「菊の紋章」が刻印された三八式歩兵銃を貸与され、教官の号令のもと、基本的な動作、即ち規律正しさを誦旨としての指導を受けるべく、二列横隊に整列し、約五十人一組の当番組長の号令で教官に対し始業の礼および点呼の報告、そして直立不動の姿勢で教育勅語、軍人勅諭の五

カ条を大声で暗唱させられるのです。その勅語、勅諭の覚えが悪く、文言の違いを指摘されると即座に教官の強烈なビンタの洗礼、一瞬目がくらみ、よろける者、または転倒する者もいました。また、全体責任の罰として、二列横隊に整列した前列と後列の者がお互い向き合い、ビンタで張り合うのです。しかしながら要領よくお互い手加減している様子が分かると、またもや頭上から教官の叱咤です。次に服装検査、三八式歩兵銃の扱いと手入れ状態の検査、これらが終わると重い三八式歩兵銃を肩に掛け隊列行進、速足行進、駆足行進を連日、約五十分間の教練で、その組の全員は疲労の極みとなり、早くこの時間から解放されたい気持ちでいっぱいでした。その他、防毒マスクをかぶつての駆け足では、要領を得ないのか苦しく呼吸困難となりました。グライダーによる滑空訓練、地上三十七センチメートルほど上昇。一、二分間の滑空なのですが、非常に恐ろしかったです。実弾射撃訓練時の、射撃音と肩への衝撃はすごく、百メートル先の標的に銃弾が命中するか、外れるか、行方不明となるか、一瞬

呆然となりました。近郊に駐屯する関東軍の指導のもと、全校生徒が重装備で紅白對抗の軍事演習を行うこともあり、全く関東軍の養成学校のように、第二学年の終わりに至るまで鍛えられたものです。ゆくゆくは戦線に参加させるための訓練なのでした。

十四、五歳の少年がいささか肉体的、精神的に成長したような気になり、生意気に私も一人前の大人になったような感覚になっていました。

昭和十九年、父の転勤に伴って奉天で暮らすようになり、私も旧制奉天第二中学校、第二学年に転校しました。

南方方面の戦況は、やや不利で戦局挽回のため神風特別攻撃隊、人間魚雷などの「特攻」が誕生し、日本内地でもB 29の来襲などが激しく、ここ奉天も空爆を受けるようになりました。奉天市街の被害は軽微でしたが、市内の大通りに被爆した爆撃弾の跡には、すごさを感じ身震いしました。

ある晴天の日の昼ごろ、空襲警報発令で直ちに避難しました。各家庭の庭に幅一・五メートル、長さ三

メートル、深さ一・五メートルほどの穴を掘って、その穴の天端に丈夫な板を渡してふさぎ、その上から土饅頭のように盛り土し、側面からの出入口を設けた簡易な防空壕で、常備している家族各自の非常持ち出し品を詰めたリュックサックを背負い、防空頭巾をかぶって防空壕へ避難し、壕の扉を閉めると暗闇で、懐中電灯の明かりが頼りとなり、家族全員が緊張と恐怖に息を殺し、敵機が去るのを願っていました。

ある日、晴れ渡る青天の上空を見上げていると、数機のB 29が銀色の輝きで悠々と飛行雲を引きながら、成層圏付近を編隊飛行していました。地上からの我が軍の高射砲弾による迎撃も砲弾が届く様子もなく、空しく敵機周辺で炸裂するのみでした。やがて、数機の我が友軍の特攻戦闘機が現れ、敵機に襲いかかり、盛んに攻撃を加えており、地上からは、我が友軍機は米粒のように小さく、大型の猛鳥に小鳥が襲いかかっているようだと思いついて見守っていたところ、友軍の特攻戦闘機が体当たり攻撃を加えたのです。すごい爆発音が地上まで届き炎上墜落、特攻を志願した若き隊

員が死ぬための猛訓練を受けて、ここ奉天の空で壮絶な戦死を遂げたのです。もしや私たちの先輩では？ いずれにせよ、やるせない思いでした。その後、敵兵がパラシュートで降下する姿を目撃し捕虜となったそうです。また、上空から小さな粒が我が家周辺に雨のごとく降り注ぎ、一瞬危機を感じましたが、異常なく安堵しました。それは米粒ほどの硫黄臭いものでした。一般生活では国家総動員令により、「挙国一致」「一億一心」「敵性語の禁止」「贅沢は敵だ」「欲しがりません勝つまでは」「撃ちてし止まん」「鬼畜米英」「一億玉砕」「月月火水木金」等の標語、日本内地では学童の疎開が始められたとか、生活物資も配給制度になっており、資源は軍需優先で、貴金属の供出など、日ごろの生活も代用品、代用食で賄うようになっていました。隣組では空襲に備え、防火用水槽の設置、そして防火および消火訓練の実施で隣組全員が、パケツリレーでの消火訓練に励んでおり、夜間は燈火管制により、室内の明かりが外部に漏れないように電灯のかさや窓を暗幕で遮り、夜間の空襲に備えるのです

が、室内は薄暗く陰気な気分でした。

我々中学校の三年生以上は、ほとんど学徒動員により各地の軍需工場で勤労に励み、また少年飛行兵、少年戦車兵、陸軍幼年学校、海軍予科練へと既に各々志願していました。残留生徒は一、二年生だけでした。

戦局はますます悪化し、南方方面の日本軍の玉砕、撤退、日中戦争の泥沼化、欧州での独軍の降伏、それでも大本営は「戦局重大なるも日本軍優勢なり」と報道していました。

昭和二十年、私も第三学年に進級と同時に奉天工業学校の採炭冶金科に転校し、やがて学徒動員により撫順炭鉱へと赴くことになり、現地の寮での合宿生活が始まりました。早速、日本人班長の訓示、採鉱現場での作業および危険を伴う作業の注意事項、そして作業日程として二交替制であることなどが説明されました。

撫順炭鉱は広く露天掘りで知られていますが、地底からの採鉱も行われているのです。班長に従って、地底の採鉱現場へと向かうのですが、生まれて初めての

経験で炭鉱の地底はいかなる所なのか、いささか不安と緊張と期待とで落ち着きませんでした。作業服に身を固め保安帽にキャップランプを装着、ガスマスクとガス検知ランプを下げ人車乗場へ、岩盤むき出しの傾斜角度約三十度の斜坑を四、五両連結の人車で地下千メートルほど下がるのですが、下がる人車の速度は速く急激に地底へ吸い込まれていくので、顔面はこわばり、心臓が高鳴り、緊張して手に汗を握る思いでした。やがて地底に到着すると、そこには巨大なトンネルがあり、幹線道では石炭運搬のトロッコが複雑な軌道を絶えず走行しており、地下都市のようで見えはるばかりでした。この幹線軌道では、万が一、個人の不注意により事故に遭遇しても問答無用とのことでしたから、慎重に行動しなければならず緊張の連続でした。枝分かれした岩盤むきだしのトンネルを徒歩で進み、詰め所に到着、そこで前日からの作業員との交替のため点呼と作業の引き継ぎを行うのです。我々学徒生は、班長の指示により二、三人のグループに分けられ、それぞれの切羽（採炭現場）に向かいます。私

たちはさらに枝分かれしたトンネルを紆余曲折しながら班長の誘導で進むのですが、迷子にならないかと不安でした。照明は一定間隔で並ぶ裸電球の明かりとキャップランプの明かりのみで薄暗く、トンネルの至るところから地下水がわき出て流水となっていました。途中トンネル側面に大きな洞窟が所々あり、進入口はバリケードで封鎖されていて、中をのぞいてみると暗闇で不気味でした。いよいよ切羽です。そこは幅約二・五メートル、高さ約二メートルの坑道でした。周囲全て黒光りする石炭層で「ピチッ」と、絶えず石炭がはじけており、気温と湿度が高くたちまち全身から汗が噴き出してきました。切羽ではコンプレッサー、削岩機による掘削音と、地上からの新鮮な空気が直径約六十センチメートルほどの鋼管から猛烈に噴き出す空気で、ものすごい騒音でした。クーリーたちは半裸体で粉塵マスクを着け、削られた石炭を手作業でトロッコに積載し、後方へ運搬、掘削が進むほどに直径約二十〜三十センチメートルの丸太で鳥居型の補強枠を一・五メートルごとに坑道に組み立てる人、

トロッコの軌道を敷設する人、それぞれの持ち場で黙々と懸命に作業に励んでいて、殺気立っており近寄り難く、私たちはただ呆然と立ち尽くすだけでした。

初日は切羽での作業の見学でした。

翌日から各自の作業にあたりました。私たち学徒生の作業内容は、切羽でガス検知ランプによる一酸化炭素ガスの有無をチェックし、確認する作業で、絶えずガスランプに注意を怠ることなく目を光らせていなければなりませんので、身が引き締まり緊張しました。過去にはガス爆発による災難で多くの犠牲者が出たことで、ガスランプの反応では少々のガス発生でもランプの炎が大きくなって危険を察知、直ちに作業中止、その切羽は危険がないことを確認するまで一時バリケードにて封鎖の処置を行い立入禁止となりました。

切羽での作業は掘削する石炭層の壁面に向かって、削岩機の先端に長さ約二メートル、直径約四センチメートルの六角形の鉄棒を回転させながら穴を数カ所開け、おのおのの穴にダイナマイトを充填し導火線に

接続、約二十メートルはなれた退避場まで延ばし電動スイッチを押すと、爆発音と爆風が一瞬退避場の前を駆け抜けるのです。全身縮みあがり、肝が潰れそうでした。しばらく安全が確認されるまで待機、なぜなら発破によるガスの噴出、落盤などの危険があるからです。

昭和二十年七月、戦局がますます悪化しているとの情報が入りました。当然クリーたちも薄々感じていたと思われませんが、私たち日本人、学徒生に対して疑心暗鬼の様子を表面に出すことなく、地底の切羽での作業は普段通りでした。このような時期に父の徴兵を知らされ、愕然としました。

五月初旬ドイツの無条件降伏、この八月初旬には広島、長崎にどえらい爆弾が投下され市街と住民は全滅、将来草木も生えぬという、全く恐ろしい事態になってきました。また、ソ連は対日宣戦を布告、突然満州国境を突破し、攻撃を開始したとのことでした。

八月十五日、班長から重大なニュースがある故、本日正午前に学徒生全員宿舎に集合の命令があり、そし

て玉音放送がラジオから流れたのですが、雑音のため聞き取れませんでした。ただ、「大日本帝国は、この太平洋戦争に負けた」という班長の説明、即ち「敗戦」です。さて、今後、我々はどうなるのか、一挙に不安と恐怖が襲いかかってくるような、身震いを感じました。今日まで虐げられてきた中国人たちが日本人に仕返しをするのか？ という心配がありました。

班長の指示により、直ちに身の回りの品をまとめ、一時それぞれの家庭に戻り、情勢を判断、安全確認後、奉天の学校へ集合せよとのこと。そして撫順駅で学友と別れ、私は夜行列車で鞍山へと向かったのです。列車は満人、中国人ではほほ満席の状態でした。乗り合わせた彼らは思ったよりは冷静で、私という日本人学生がいることは承知しながら、普段と変わらぬ会話で、「どこまで行くのか」と話しかけてくれました。また問食を分け合ったりして穏やかで和らいだ雰囲気でした。日本は、果たして戦争に負けたのかという疑問が頭の中をかすめるのでした。

翌朝、鞍山駅に到着。徒歩で帰宅途中の市街は、何

も変化した様子もなく平静でした。父は徴兵で不在でしたが、母、弟、妹たちは元気な様子で安堵しました。しかし母は、敗戦によるショックと父の安否で一抹の不安を隠しきれぬようでした。父が不在なるが為、家族の今後の生活を考えねばならなかったのですが、当分急激な情勢の変化もなさそうなので、まずは指示通り奉天の学校に行くことにして、翌朝、鞍山駅に来てみると、全列車一時運休で、夕刻より運転再開予定とのことでした。夜九時ごろ再び鞍山駅へ、途中の街路灯はすべて消され暗闇で人通りも少なく、暴漢に遭わないとも限らず、そのときに対応するべく木刀を腰だめにし、周囲に目配りしつつ歩くのですが、足が地に着かぬようで恐怖と震えが全身に走り、歩行も思うままになりませんでした。もし、闇討ちに出くわしたら、果たして冷静な行動がとれるのかと、またもや不安と恐怖にかられます。やっと鞍山駅に到着、しかしまだ全列車運行停止とのこと、呆然としてしまい、まさに非常事態の要素を感じました。やむなく再び帰宅、幸い往復とも事故なく無事でした。

数日後、父も兵役解除により帰宅し、家族全員そろい安堵し、今後の生活を考えねばと話し合いました。

当時、父は運輸会社鞍山支店の責任者でしたので、早速支店の残務整理に奔走することになり、幸い運輸会社の倉庫から当分必要な生活物資を社員に分配することができ、一安心しました。私も奉天の学校へ当方の現況を報告すべく考えましたが、当時の通信手段の、電報、電話は遮断され通信不能であったため、断念せざるをえませんでした。八月九日、既にソ連は卑怯にも突如として日ソ不可侵条約を破り、満州の全国境から侵入し当地にも迫りつつあり、また中国の国府軍と八路军の侵攻などの情報も刻々と耳に入り、やがて三者、混戦の戦場になるのではと、戦々恐々としていました。

予想どおり、中国人たちの反日行動が徐々に現れてきたようで、ある日の夜半、遠くから聞こえる時ならぬ叫び声で目覚め「すわ！ 暴動発生」と覚悟をしました。暴徒の叫び声が近くまで迫り、また、一時静かになり再び喚声を繰り返し、威嚇していて、我々を襲

い暴行し略奪せんとするのでしようか、我々は無抵抗のままに彼らのなすがままの暴動騒ぎであり、家族全員息を殺し、心臓が高鳴り暗闇の中で恐怖を味わうはかありませんでした。このような暴動騒ぎは常に夜半に起き、昼間には不穏な気配はなかったが、しかし警戒は怠ることができませんでした。これらを機に防衛手段として、家屋の道路側のガラス窓全体を丈夫な板で塞ぎ防御態勢を整えたのです。これも気休めにしか過ぎませんでした。私たちの住宅はれんが造りの平屋建てで窓は外側と内側の二重ガラス窓で、雨戸はありませんでした。そのせいか部屋は少々薄暗くなりますが、それも致し方なく、電気、水道、ガスの供給も徐々に機能が停滞気味で、食糧の流通も悪くなりつつあり、これらの確保に努力しなければなりませんでした。煮炊きに必要な煉炭、木炭、冬期暖房のペチカ、ストーブに必要な薪炭、主食としてのコーリヤン、粟、トウモロコシ、小麦粉などで白米はありませんでした。今までの安定した生活が急変し、不安定な生活の中で、運輸会社で父と親交のあったクリーン頭が、

再々我が家を訪れ、不足の生活物資を供給してくれたり、また、時々刻々の情報をもたらし続けて、危険を顧みず陰ひなたなく奔走してもらい、随分と助かっていました。しかし水道は断水状態なので、飲料水などは満人街の井戸まで汲みに行かなければならず、運搬方法として古いリヤカーを買ったものの車輪はなく、廃墟となった工場跡から直径三センチメートルほどの鑄鉄製の歯車を探して車輪の代用として、ドラム缶を乗せて毎日朝夕、父とともに周回を警戒しながら水くみをしました。

ある昼下がり、遠くから轟音を響かせて接近する物体に気づき、見張っていたところ、幹線道路を大型の軍用トラックが二、三十台列をなして私の目前を通り、そして停車、すると各トラックの荷台の幌の中から十数人の武装した兵隊が現れたのです。「やっ」、それはまさしく凶体の大きい赤ら顔のソ連兵と分かり、一目散に逃げ帰り厳重に戸締まりして警戒態勢、母、弟、姉たちは床下（子供が四つんばいで移動できる高さがあった）に避難、耳を澄ましていると、三、四人

のグループでなにやらわめきながら、家々の玄関扉を今にも壊れんばかりに激しく叩き、怒鳴っている。我が家の玄関扉も激しく叩き始めた。私は震え上がり顔面蒼白、全身が硬直状態、心臓の鼓動は激しく脈打ち体内の血液が逆流している感じでした。父もいささか緊張していて、度胸を決め玄関扉を開けるや三人のソ連兵が拳銃と自動小銃で威嚇し略奪にかかるべく、ロシア語でまくしたてましたが、私たち父子には全く理解できませんでした。ついには土足で上がり込み、家中をくまなくかき回してめぼしい貴金属を奪い取って去っていききました。ただ、ただ、呆然と佇み、彼らのがすがままに、無抵抗でした。

話によると、ソ連兵の乱暴狼藉は日に余り、各地の日本人を襲い、殺人、婦女強姦、略奪暴行を繰り返しながら南進しているとのことでした。頼みの関東軍は完全に無力状態で、日本人はこの騒乱で落ち込んでおり、疲労困憊でした。

ソ連は、あの日露戦争の仕返しと考えているのか、日ソ条約など破ることはなんとも思わぬ国だったのだ

と思いましたが、関東軍主力は既に南方方面の島々に運ばれていて、手薄なところに怒涛の如く侵攻したので、いかんせん敗者たる者なすすべもないのでした。

今後日本人はどうなるのか、日本内地へ無事帰国できるのか、彼ら戦勝国のしもべとして永遠に強制労働に従事させられるのかなどち、またでの流言飛語が飛び交う有様でした。

これからの生活の糧として自給自足をしなければと思ひ、父が野菜の種子を仕入れ、また我が家手持ちの古着、雑貨、家具などを売り食いすべく街頭で売りさばくのですが、中国人からは買ったたかれ、馬鹿にされ、思うようには売れません。そのうちに、近郊では国府軍と八路軍の交戦が続き当地鞍山にも不気味な気配が感じられてきました。

ある日の早朝、突然の銃声、両軍の交戦勃発でした。初期は小規模な銃撃戦でしたが、両軍とも次第に激しさを増して、本格的な市街戦の様相に発展してきました。私たち日本人はそれぞれの自宅での避難方法しかなく、安全な場所は他になく、息を潜めて

成り行きを見守るほかありませんでした。外部に面する窓のすべては既に板で塞ぎ保護していますが、いつ銃弾が飛んでくるやもしれないと思うと、さらなる恐怖との戦いでした。当然、銃撃戦は激しく、銃弾が飛び交い、外壁に被弾し、室内にも数発被弾し、緊張して母、弟、妹たちは例によって床下、押入などに避難。父と私は、壁面に張り付いていて、銃撃戦の収まるのを待っていました。窓の間から両軍の戦闘状況をのぞきますと、八路軍兵士の服装は私服の者もあり、ゲリラ兵のような服装の者もいて、小銃は、日本軍の武装解除により得た三八式歩兵銃で、相手の国府軍兵士は米軍式の自動小銃で応戦していました。近くの小高い丘に八路軍の陣地があるようで、国府軍の追撃砲弾が撃ち込まれており、上空からは国府軍の戦闘機がところかまわずの機銃掃射。街路樹の幹が途中から裂けてふっとんでいる有様でした。この交戦も三、四十分間で収まり、国府軍が制圧したのですが、三、四日過ぎますと再び八路軍の反撃で今度は八路軍が制圧するなど、お互い三日天下の様相でした。うわさ

によりますと、戦闘後お互いの捕虜は直ちに銃殺刑に処されて、その死体処理には日本人を使役に駆り出して広場に穴を掘らせて、埋葬したそうです。また、兩軍の負傷兵たちについては、日本人の使役を動員して、四人一組の担架で彼らを後方へ移送して行きました。父も負傷兵の移送に一週間使役に従事させられましたが、無事帰宅し、疲労甚だしく疲れ果てた様子でした。戦闘は小康状態になりましたが、まだ警戒を怠ることは出来ませんでした。

ある日の昼下がりのこと、突然の爆発音、またもや兩軍の衝突かと思いい、とっさに飛び出してみたところ、弟が「やられた！」と叫びながら全身に鮮血を浴びて駆け込んできました。一瞬の出来事で驚きと恐怖に襲われて顔面蒼白となり、震えが止まらぬ様子でした。直ちに母が傷の応急処置を施した結果、軽傷にて一安心でした。友人たちの話では、二、三人で遊んでいる最中に、電柱の根本に楕円状の鉄の塊を発見し、持って遊んでいるうちに暴発したようでした。幸いに他の友人たちも軽傷でした。

このことは、日本人を狙った「テロ」の仕業か、不気味であり、危険が多く油断ならない状況でした。

昭和二十一年八月初旬、共産軍が制圧して、やや平靜な時期となり、内地への引揚げ帰国が話題になってきました。難民としての引揚げであり、途中に異なる困難が待ち受けているやら、想像もつかず不安におびえていました。当局の指示で引揚げ準備が始まり、持ち帰れる品物の制限がありました。それは身の回りの衣類、日持ちする食糧の確保、各自リュックサックにあれもこれも詰め込む品定めに余念なく多忙な毎日でした。その他の家財道具などはすべて、今日まで陰ひなたなく援助していただいたクローリー頭に処理を一任しました。彼の苦勞に報いることもできずに、悲しい永遠の別れになるのです。

これまでの十六年間、両親が築いた満州での生活と全財産は、無惨にも崩壊することになってしまいました。両親の無念な心情は何とも計り知れず無念、残念だけが残りました。この大戦でどうしてこんな卑劣な仕打ちを受けなければならないのかという思いでいっ

ばいでした。

いよいよ引揚げ当日になり、この朝から我々は避難民となったのです。地区の引揚げで日本人は、鞍山貨物駅に集合しましたが、付近には大勢の満人たちが遠巻きになって我々を見守り、威嚇するまなざしで見つめており不気味でした。ホームの車両は客車ではなく貨車が待機して、やがて定められた車両に乗車を開始、私たち家族の乗った貨車は無蓋車で、上部にはシートで仮屋根を設けて雨露をしのぐ程度、床はむしろ敷きで全員が座るだけの余裕がなくて、横たわることは不可能であり、それに各自の荷物でこの上なき混雑で、当然トイレなどはなく、我々はまったく貨物扱いでした。憤慨しても致し方ありませんでした。そして点呼やら手続きなどで、直ちに出発には至りません。二、三時間待機後によりやく奉天方面に向かうべく発車するも、途中各駅ごとに二時間ほど停車しては、再度の点呼と双方の諸手続きと交渉でスムーズにはかどりません。奉天到着までは、このようにスローテンポな避難の道程でした。奉天に到着後、収容所に

集められて、また、点呼と持ち物の検査。その日は野宿、夜露に濡れての一夜を明かして、翌日、再び貨車にて出発しましたが、例のごとくに各駅停車での避難民移送で、錦州から葫蘆島までの避難行の様子はどうか記憶に浮かんできません。そぼ降る小雨のなか葫蘆島港に到着、岸壁に巨大に見えた貨物船「リパティール」四千トンが停泊、我々避難民の受け入れ態勢が整っている様子でした。

今日まで、おおむね好天に恵まれて、中国人からの略奪、暴行、乱暴狼藉もなく全員無事に過ごしてきたことは幸いですが、精神的にも肉体的にも疲労困憊でした。やがて乗船の時刻となり、最終の所持品検査があつて、規定以外に隠し持っている物がなにか、一人一人厳重な検査で、特に貴金属などは直ちに没収されそうになりました。とっさに他のふところに隠して難を逃れました。検査の結果、異常なき者から乗船を許され、重い足取りで地上から船の上甲板に至る勾配のある、いささか不安定な仮棧橋を渡り乗船。上甲板から地上を見下ろすと避難民の列が続き、全員黙々と上

甲板へ向かって歩を進めています。

既に昭和二十年八月十五日をもって、満州という国は消え失せており、十六年間の戦争続きの中の学生生活が走馬灯のごとく目に浮かびました。特に撫順炭鉱での学徒動員において、八月十五日以降散り散りになった教師、班長、先輩、学友たちはその後、いかなる道のりを歩まれたのかと思うと、やるせない気持ちでした。

上甲板から急勾配のタラップを下り、各々指定された場所に落ち着くこととなりました。船倉は二層構造で我々は最下部の船底の一区画をあてがわれましたが、成人一人に畳半畳あまりで、床はむしろ敷きの辛うじて体を横たえられる程度、人と各人の荷物と重なりあうほどでした。船倉なので窓はなく薄暗く、照明は数えるほどの裸電球のみで、しかも換気が悪く人いざと蒸し暑さでいたたまれずに上甲板で過ごす人たちもいました。まして鞍山出発以来の避難生活の中で、洗顔、入浴などは皆無であり全員異様な形相となっていました。とにかく疲労困憊のためにぐったり

となって男女入り乱れて睡眠をむさぼっていました。

数時間経過後に耳鳴りするほどの大きなエンジン音が響き、出帆準備の様子となり、早速上甲板に出て、小雨煙る葫蘆島港の岸壁を眺めました。昭和二十一年八月の何日の何時、そして何処なのかも記憶がありませんが、ともづなが解かれ岸壁から徐々に離れ湾外に出て、だんだんに陸地から遠ざかって行きます。順調な航海のようですが、本当に日本内地へ向かっているのだろうかと思念を抱いていましたが、乗船した以上は船頭任せでした。航海中の船内での生活は、水の使用時間が制限されていて、食事は乾パンにカボチャのつるが入った粟粥であり、船員たちは日本人のようですが彼らはいかなる待遇なのか、我々避難民との格差があったように覚えていきます。

どうやら順調に日本内地へ航行しています。途中、玄界灘を通過した際は、船が大いに揺れだし大勢の人たちが船酔いで苦しめられ、吐き出す者が続出し、私もその一人でしたが、船倉で横たわっていても上甲板に出てもどうにもならず、体内の臓物が一斉に飛び出

さんばかりで、食事など全く受け付けません。私の家族の中では、父のみが平然としていました。また、航行途中に病死された方もおり、水葬して全員で冥福を祈りました。その家族にとっては、日本内地を目前にしてのことで誠に残念、無念でしょう。

三、四日の航行の後に、遠方に緑豊かな島々が見え始め陸地に近づきつつあることが分かりました。日本内地です。各自上甲板から故郷への思いを巡らせているのでしょうか、安堵の表情が伺われました。私は日本内地を知らないのに、異国に移住するような気持ちで日本内地とはいかなる国か興味を抱いていました。将来この国のいずれかの地に定住するのだろうかと思上甲板から陸地に視線を向けていました。

やがて佐世保湾内に停泊、翌日全員の検疫検診、入国手続、各人は喜々として上陸準備をしていましたが、すぐに上陸許可にはならず、四、五日間船内で待機状態となりました。疫病発生による足止めかとも思いましたが、船内ではその様な気配は感じられませんでした。慢性的な飢えと虚脱感、肉体的、精神的にも

限界に達しつつあり、一刻も早く上陸を願うばかりでした。ようやく船は錨を上げ佐世保湾岸壁に接岸し上陸開始となりました。各人は荷物を背負い敗残兵のごとく異様な体と形相で、足取りも重く棧橋を下って、日本内地の土地に第一歩を踏み出したのでした。そして、また、収容所へと導かれ再度の検疫検診、消毒のためにDDTの洗礼、全身白い粉を浴びせられ動物扱いでした。やがて食事となり支給された大きな麦の混ぜた握り飯と味噌汁、久しぶりの米飯で誠にうまくむさぼり食いつきました。

鞍山出発以来、避難民となり苦境に耐え辛うじて日本内地にたどり着き、やっと各々の故郷へと向かい、内地での新たな生活を営むのですが、敗戦後の国内の情勢も混乱状況で、更なる困難が待ち受けていることを覚悟せねばと考えました。私たち家族は父の故郷へ向かうべく佐世保駅から引揚者専用列車で出発、車窓からの眺めでは、日本家屋は木造ながら外壁は土壁で塗り固め、柱がむき出しなので未完成ではとも思いましたし、道幅も狭く、鉄道の軌道幅も狭いので、国土

の狭さを痛感しました。途中で広島市の惨状を見るに建物ほとんど崩壊して一面焼け野原で、原爆の恐ろしさともごたらしさを強く感じました。岡山県宇野港から国鉄宇高連絡船で父の郷里高松築港に到着しましたが、高松市街も爆撃によりほぼ焼け野原でした。

当分の間、父方の親せぎの家で家族六人の間借り生活が始まることとなり、一応は落ち着くことができ、安堵し、早速父は、職探しと家族の住まい探し、そして農家の知人を頼りにカボチャ、サツマイモなど主食に代わる食料の買い出しに奔走する日々でした。私の学業も旧制中学三年生で中断しており市内高校への転校は、私たちより先に引き揚げ帰国した人たちで各高校とも満員で余裕なく諦めざるをえませんでした。

昭和二十一年十月、父はあらゆるつてを頼って奔走の結果、臨時雇いの職を確保、私も市内の鋳物工場の職を得ることができました。次に私たちの住まい探しは、敗戦後の復興も徐々に進んではいるようでしたが、海外からの引揚者、また、戦災で被害に遭われた

方が大勢で、公営住宅の申し込みをしても抽選なので簡単に事が運ぶ訳ではなく、ましていつまでも親せきに厄介になっていることも気まずく、民間のアパートの十畳部屋を仮住居としました。

昭和二十二年、建設会社へ転職し、続いて工芸高校建築家夜間部第一学年に転入し昼間は社会人、夜間は学生として勉学の生活でした。幸いに市営住宅の入居が決まり、家族六人はようやくくにして狭いながらも定住の居を得て一安心でした。

昭和二十七年、工芸高校卒業後、本格的に社会人として歩み始めることになりましたが、その矢先会社が突然倒産し全員解雇となりショックでした。再び就職活動に転じるもままならず、その後、大阪の建設会社に就職、単身赴任で種々の建築現場を経験し実績を積み重ね、昭和五十年に建築積算事務所を設立、紆余曲折あれど生涯現役の生活となりました。振り返り見るに、歴史とは常に勝者により作られるものですが、長い歳月の後には真実が明らかになるものです。

十二、三歳のころから、当時の軍閥による帝国主義

國家の風潮故に軍国少年として満州国という國家で育ちましたが、そこは関東軍という日本の軍隊が支配していたようなものでした。満州に入植していた多くの開拓民の方々には、悲惨このうえない民族の悲劇が始まり、避難民として各地をさまよひ多大の犠牲者を出した事実は、それはそれは聞くに耐え難く、その因果がいまだに中国残留孤児の方々の肉親捜しということに現れています。

戦争とは軍隊と軍隊の戦いで、その国の民衆などはほとんど眼中になく、力の論理でいまだに地球上で地域紛争、民族紛争が絶えることなく、「人間は戦争をするものである」という教訓を残すのみで、誠に残念なことです。

嗚呼、こころの故郷撫順の日々よ！

大阪府 佐藤 周

祖国への引揚げ

「おい、早く甲板に上がって来いよ！ 日本に着いたぞ！ 見てみる、綺麗な緑の山と青い海が凄いで、我々はどうとう祖国日本に帰って来たんだ！」。貨物船を改造した引揚げ船「山澄丸」の暗い船倉に、私たちは一週間も閉じ込められる日が続いていた。何かあると集まっては、引揚げ船の船員から教えられた当時日本ではやっていた「リンゴの歌」、中学校の運動部の応援歌、高等学校の寮歌などを、ひそかに持ち込んでいた高粱酒をあふり、狂喜乱舞し、憂さを晴らしていた若い仲間たちは、この絶叫に誘われると急な階段を先を争って駆け上った。そこには中国大陸や遼東・朝鮮半島の見慣れたのとは、全く違った景色が展開され、「おお、遂に日本に帰り着いたんだ！」と感涙に